

「馬鹿者」を命ず!

第三十五回 悠太、馬鹿者になるその二 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

前回までのあらすじ
 伊予南フェアを失敗させる亀田の企みはション・次川の告白で回避できた。同時に薫子と次川の間係を知った悠太は、伊予南市の広報ビデオをモニターで見て、榎社長の本社移転を翻意させるアイデアを明確にする。

一 週間ぶりに見る伊予南市の風景はとても懐かしく、伊予南フェアの準備でくたびれた悠太の心と体を癒やしてくれるようだった。

JR伊予南駅の改札をくぐり、商店街のコンビニに立ち寄った悠太は弁当と缶コーヒーを買い、事務所兼社宅を目指した。時刻は午後一時過ぎ、ようやく取りつけた二名島バッテリー社長の榎との面会までにはまだ四時間近くある。

昼食を食べたら特に何をするでもなく、ゆっくりしようと思つた。のんびりできるのは久しぶりなのだ。

ヴァインセント・ファンド副社長の次川が白状してくれたおかげで亀田の企みが分かり、伊予南市から送った名産・特産品が西朱雀地藏通り商店街に届かないという最悪の事態は何とか回避できた。

西朱雀地藏通り商店街に開店する予定の伊予南市のアンテナショップもほぼ改装が

終わった。

残された最大の課題は榎を翻意させ、二名島バッテリーの本社工場移転を阻止することだ。

そのためのアイデアは胸中にある。

伊予南フェアでは、「パン焼き工房・まつしま」での結婚式やダンス会の映像をアンテナショップで流す予定で、そのための実証実験を、一週間前に行った時のことだ。堤誠一のサークル仲間の四人が美しい伊予南市の風景を背景に踊る映像を見て、悠太は榎を翻意させるためのアイデアが明確な形になっていくのを意識したのだった。恐らくはこれが榎に挑む最後のチャンスに違いない。

果たして「伊予南市にとどまった方が二名島バッテリーにとって経済的メリットがある」という根拠になってくれるだろうか？

ページのバグを直さないといけませんので、失礼します！」

名女川が逃げるように事務所の土間に入っていた。

悠太は麻衣に向き直り、表情を変えずに「麻衣に話があるんだ」と言った。

「あたしも悠太に話があるの」

「じゃあ麻衣から」

「僕が以前、麻衣に言ったことを覚えているかな? 『麻衣は西朱雀プロジェクトの仕事を手伝ってくれている。だったらさち

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。
榎太一 (えのき・たいち) 76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。
ション・次川 (つぎかわ) 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴァインセント・ファンド副社長。
亀田太 (かめだ・ふとし) 29歳、伊予南市役所・地域振興課員を解雇され、新庄の部下として伊予南プロジェクトの社員となるが……。
堤誠一 (つつみ・せいいち) 71歳、元大阪の大手電機メーカー社員、再婚を決意し「パン焼き工房・まつしま」で披露宴を開く。

青山麻衣 (あおやま・まい) 24歳、悠太の元カノ。悠太を振っておきながら再び伊予南市にやってくる。悠太の仕事を手伝い始める。
四分地恒三 (しぶち・こうぞう) 59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。
名女川直行 (なめかわ・なおゆき) 27歳、麻衣の会社員時代の先輩で彼氏、麻衣を追いかけて……。
大渡薫子 (おおわたり・かおるこ) 21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘で榎太一の孫。京大阪大学で建築を学ぶ。
広岡卓次 (ひろおか・たくじ) 49歳、地域おこし協力隊員として伊予南市に移住し、その後伊予南プロジェクトの幹部社員となる。

事務所兼社宅の古い冠木門を開けた悠太は母屋の窓の向こうに人影がよぎるのを見た。麻衣だろうか? それなら都合だ。麻衣に話したいことがあった。西朱雀プロジェクト社長の四分地と交渉して、麻衣が喜ぶに違いない約束を結んだのだ。

引き戸を開け、上がりかまちに足をかけたその瞬間、畳部屋にいた麻衣と名女川が慌てて体を引き離れたのが目に入った。抱き合っていたのだ。

悠太は呆けたように口を開けて二人を交互に見た。

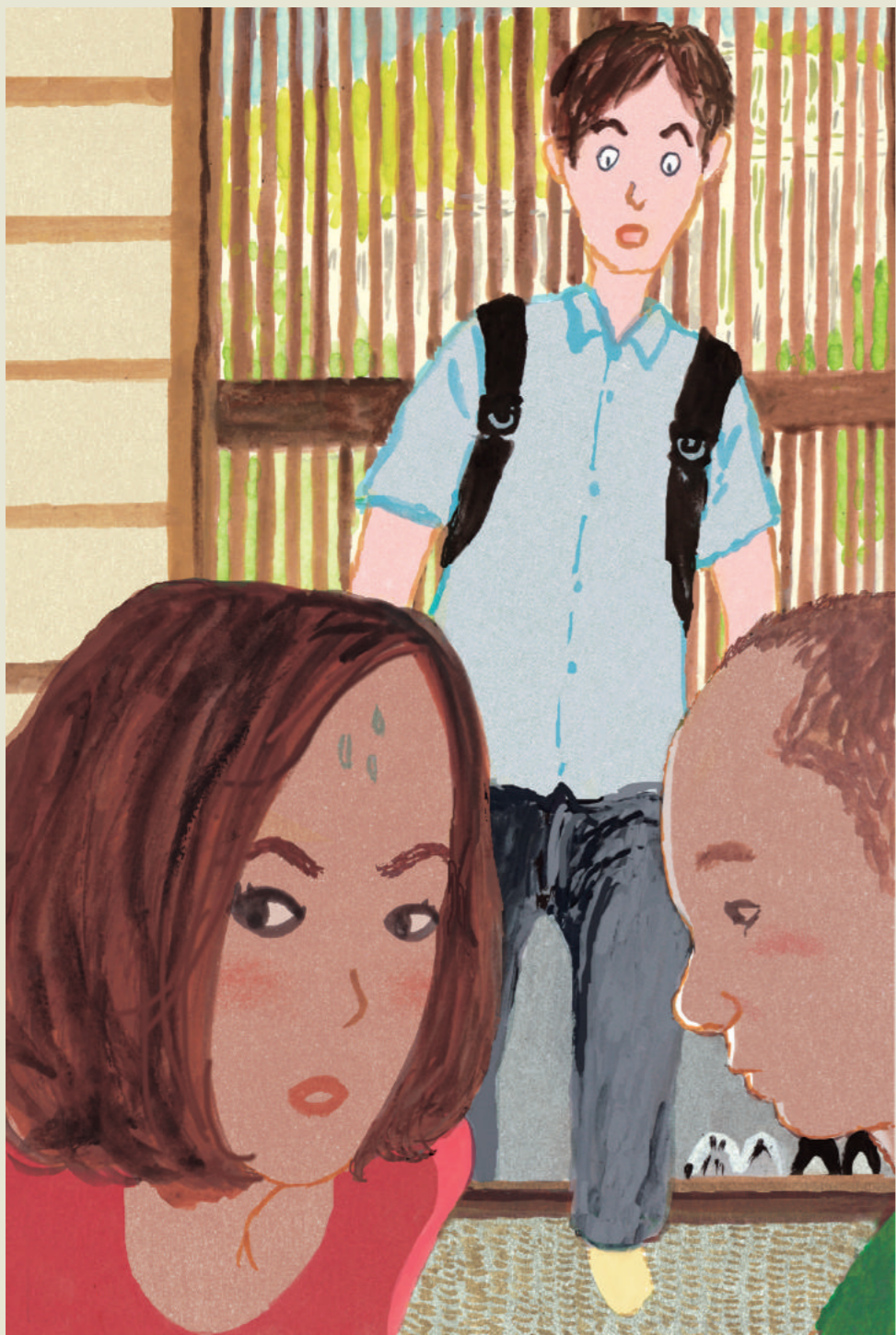
最近こんなシチュエーションに出くわしたのをすぐに思い出した。あれは次川が担ぎ込まれた病室だ。そこには薫子がいってベッドに横たわる次川の手を握っていた。

あの時、悠太は「もしかして、これはドッキリではないか?」と思つたのだ。「薫子は悠太をかついで慌てさせようとしているのに違いない」と。しかし、そうではなかった……。

「驚いたわ。いきなり帰ってくるなんて」麻衣は冷静さを装ったが、頬がうっすらと赤く染まり、後ろ髪が少し乱れている。

悠太は麻衣から目を逸らし「こっちで大仕事があるんだよ」と言った。

「あの、私も仕事がありますので。ホーム



んとお金をもらった方がいい』って。『僕から四分地さんに話してみるから』とも言ったよね」

「覚えてるわ。『労働の対価はきちんともらうべきだ』って悠太は言ってくれたわよね。あたし』そこまで言うなら悠太に任せる』と返事したと思う」

「その通りだよ。それで昨日、四分地さんにそのことを相談してみたんだよ。そうしたら『ただ働きさせるのは絶対にあらずい』『これまで手伝ってくれた分も含めてきちんと対価を支払う』と約束してくれた」

悠太は麻衣の顔を覗き込んだが、その表情には何の変化もなかった。

「それだけじゃない。四分地さんはこうも言ってくれた。もし麻衣が望むのなら、これからも西朱雀プロジェクトで働いてほしいって」

麻衣は悠太から目を逸らし、どう言ったものかと宙に視線を這わせた。

しばらくして悠太に向き直り「ごめん」と済まなそうに言った。

「悠太の気遣いは嬉しいけれど、あたし決めたの」

悠太はげんな顔をして「何を決めたの？」と聞いた。

「悠太と小海島に行った時、あたしが話したことを覚えている？」

「話したことって？」

「田舎に住むのもいいかなと思ってる』って」

悠太は小海島での麻衣との会話を思い出した。

そうだった。麻衣は「ウェブデザイナーとかの仕事だったら、ネットさえつながっていればどこでもやれるから、都会を離れてみるのもいいかな」と言ったのだった。

「あたし、小海島に移住するわ」

「本気？」

「本気よ。悠太が朝一番で伊予南に帰ったあの日、あたし、小海島の市役所を訪ねて空き家を何軒か見せてもらったの。それから出口栄さん、憶えているわよね？ 大手の通信会社に勤めていたけれど、家族と一緒に小海島に移住して、オリーブの栽培とかを手がけるシマウミソラ社に転職した人」

「覚えているよ」

「その出口さんにも空き家を探してもらったの。それで何軒か良さそうな物件が見つかったのよ」

悠太はかぶりを振った。

「僕にはどうしても麻衣と田舎暮らしが結びつかないよ。きっと一カ月で飽きてしまうと思う」

「前にも言ったでしょう？ あたし、会社

の先輩たちを見ていて、皆、大変そうだな

ってずっと思っていたって。毎日、夜遅くまで仕事して、土日でも会社に駆り出されて、高い家賃や住宅ローンを払い続けて……。

それから父の話もしたわよね。父は地元南魚沼市で公務員になる話もあったけれど、それを断って東京で就職したの。エンジンになるのが夢だったから。でも、エンジンアの仕事ができたのは三十代前半までで、それからはずっと総務の仕事だった。あたしが知っている父は、株主総会の準備とか

社員の不祥事の後始末に追われている、何

だか辛そうな姿ばかりだわ。ねえ、悠太、そんなところに突っ立っていないで座らない？」

悠太は言われるままに腰を下ろした。

麻衣もべたりと畳に座る。

「いつ移住するつもり？」

「伊予南プロジェクトが終わったらすぐ」

「仕事はどうするの？」

「フリーのウェブデザイナーとしてやっていくつもりよ。もし悠太の会社でウェブデザイナーの仕事があったら回してね」

悠太はため息をついた。

「一人で行くつもり？」

麻衣の表情が揺れた。

「麻衣……」

「一人じゃないわ」

さんだったっけ？ 大学で建築を勉強して

いて、古民家の再生に興味があって、ここに見学に来たんだとか言っていたわよね。

あたしよりも彼女が気になっていたんでしよう？ 綺麗な女だったわよね」

悠太は麻衣をまじまじと見つめた。

確かに麻衣の言う通りだった。薫子のことが気になっていたのだ。それどころか薫子と一緒に尾花市に旅行して、もしかしたら彼女もまた僕のことを好きなのではないかと愚かな勘違いをしていたのだ。薫子はあのいけすかないション・次川と付き合っていて、大学を卒業したら結婚したいとまで思っているのを知らずに……。

土間の引き戸が開き、名女川が畳部屋に入ってきた。

悠太を見て、深々とお辞儀する。

「麻衣さんのこと、幸せにしますから」

悠太は名女川のすっきり薄くなった頭頂部を見つめた。この男と麻衣は小海島で暮らすと言うのだ。

そうか、これは夢なんだと悠太は思った。薫子が次川と付き合っているのは現実だけれど、こちらは昼寝の夢なのだ。

右手で左手の甲を思いきりつねってみる。痛みをはっきり感じた。

「麻衣さんのこと、許してあげてください。」

名女川は顔を上げて言い、もう一度深々

「誰と？ まさか……名女川さん？」

麻衣はうなずいた。

「そのまさかなの」

「どうして……」

悠太は自分の声を引きつっているのを意識したが、取り繕うことはできなかった。

「名女川さんとは別れたんでしょう？ 『彼はあたしを騙していた。本気で付き合う気なんか初めからなかった。新人の女の子にちよっかいを出す札付きだった』麻衣はそう言っていたよね」

「言ったわ」

「もう二度と付き合わないわよ』とも言うっていた。それがなぜ……」

「ごめん」

「謝って言っているんじゃないよ！ どうして名女川さんと一緒に小海島に行くんだよ！」

「『騙された』と言ったのも『二度と付き合わない』と言ったのも本心だったわ。でも……ここで『パン焼き工房・まつしま』

や『古民家一覧』のホームページを作るときにアドバイスしてもらったり手伝ってもらったりして、『ああ、やっぱり技術力は

凄いな』と見直したのよ。一緒に仕事をす

るパートナーとして頼りがいがあると思っ

たの」

とお辞儀した。

国道を南に下って海沿いの山に登り、中腹にある展望台が見えてきたころには混乱した気持ちはいくらか落ち着きを取り戻していた。

展望台の駐車場にラパンを停めた悠太は、眼下に見える二名島バッテリーの巨大な本社工場をフロントガラス越しに眺めた。その向こうに広がる海は曇天のため鉛のようにくすんでいる。

深い喪失感で胸がいっぱいになった。それは薫子から「次川と付き合っているんです。大学を卒業したら結婚したいと思っています」と言われた時よりもずっと強い感情だった。麻衣にはすでに振られているのに、今さらなぜこんな気持ちになるのだろう。

悠太は麻衣と一緒にこの展望台にやって来た日のことを思い出した。麻衣が仕事のついでに伊予南市にやってきて、久しぶりにいろんな話をしたっけ。

そうだ、あれ以来、麻衣は悠太のかたわらにいて、ずっと力を貸してくれていたのだ。

それなのに麻衣の気持ちをこれっぽっちも考えたことはなかった。

小海島に向かうラパンの助手席で、麻衣体な庵に悠太を案内した。純和風の数寄屋造りで、意外に広い和室の中央に榎が座り、テーブルの肴をつつきながら、白ワインを飲んでた。

「よく来たな。君も飲むだろう？」

榎は悠太の返事も待たずに向かいに置いた空のワイングラスに白ワインを注いだ。

「本社工場移転の件では少しばかり悪いことをしたな。とっととベトナムへの移転を決めたことについてはきつと君も気分を害しただろうが、経営とは時間との闘いだからな。今回のベトナム政府からの提案を逃してしまつたら、これに匹敵する好条件の案件を獲得するまでにどれほどの時間を浪費してしまうか分からない。そんなわけで即断即決させてもらったわけだ」

悠太は白ワインを一口飲み「追加のアイデアがあるんです」と言った。

榎は子持ち昆布を口に放り込み「ふむ」と言った。

「話してみる」

「榎さんは以前、高齢者たちにとってどんな住まい方が最も安全、安心、快適なのか、終末までの幸せなライフスタイルとはどんなものなのか、答えを出してみたいと言われましたよね」

「ああ、言ったな。二名島バッテリーとしてこんな暮らし方があるんじゃないかと提

は神妙な顔をして言った。

「あたし、もし悠太が許してくれるならば……」

麻衣はそれきり黙り込み、悠太から視線を逸らして通り過ぎる車窓の風景を見つめていた。

あの時、麻衣が噛み殺した言葉を今の悠太はよく分かっていた。

悠太はアクセルを踏み、駐車場を出た。なぜだか広岡に会いたくなつたのだった。

「どうした？」

車を下りた悠太に気づき、広岡は日焼けした顔を綻ばせた。

目じりに寄つた深い皺を見たたん、熱いものが込み上げてきた。

悠太は慌てて両手で顔を覆つたが、抑えようとしても涙が自然にあふれ出てくる。

嗚咽なげなげは号泣ごうきに変わり、悠太は声を上げて泣き出した。

広岡は何も言わず、洗濯物をかける手を止めて悠太を見つめた。

やがて悠太が泣き止むのを待って、微笑みを浮かべた。

案するのが俺の人生最後の夢というか目標だからな」

「それで僕がそのアイデアを高齢者たち自身に考えてもらったかどうかと提案したら『面白い』と言ってくれました。それから『そんな人材を見つけられるか？』とも言われました。『様々な経歴を背負つた人材を最低でも六、七人は集めたいができるか』と『その通りだな』

「集められると思います。六、七人どころか二十人でも三十人でも集められるかもしれません」

「ほう！」

「ネットで動画を流して『高齢者たちにとってどんな住まい方が最も安全、安心、快適なのか、終末までの幸せなライフスタイルとはどんなものなのか、一緒に考えてみませんか』と募集をかけるんです。今度の伊予南フェアをきっかけに西朱雀地蔵通り商店街に伊予南市のアンテナショップが開店します。そのモニターで動画を流し続けるんです。西朱雀地蔵通り商店街、ご存知ですよ。『おじいさん・おばあさんの六本木』とも呼ばれている商店街です。それでその動画の内容は榎さんの頭の中にあるイメージをアニメにしてもいいかもしれません。伊予南市の美しい風景にコンピュータグラフィックスを被せるのもありだ

「少しは気が済んだか？」

悠太はコクリとうなずいた。

「何があつたのか俺に聞いてほしいか？」

悠太はまたコクリとうなずいた。

「もしかして振られたか？」

悠太は「なぜ分かつたのか？」という顔をした。

「お前の様子を見ていれば分かるよ。振られることについては、俺はお前の大先輩だからな。振られるのは辛いよな。心が折れちゃうよな」

広岡は真顔になった。

「でも負けるな。お前はまちおこし特命社員なんだ。辛いのも悲しいのも呑み込んでとことん馬鹿になってみる。俺はいつでも力になってやるぞ」

午後五時五分前、悠太は市街地を見下ろす小高い丘の上にある榎の邸宅のベルを鳴らした。

「どうぞ」と言う女性のスピーカーを通してたぐもつた声がどこからか聞こえ、巨大な門が自動で開く。

悠太が玄関の前まで来たのと同時にドアが開き、中年の女性が姿を現した。

「榎様は離れにいらっしゃいますので、こちらへどうぞ」

中年の女性は広大な母屋の右手にある小



と思います」

「面白いな」

榎が興味深げな顔をした。

「石打くん、君は俺が人生第四コーナーのライフスタイル研究所を起ち上げたら参加してくれるか？」

榎は真剣な顔をした。

まちおこし特命社員
石打悠太
**馬鹿者を
命ず!**

Kazuhiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・大正大学表現学部客員教授。

1959年、横浜市生まれ。日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、

独立。

『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、『日経ビジネス』発行人などを務めた後、2014年3月、

1997年に長編ミステリー『錆色（さびいろ）の警鐘』（渋沢和樹の筆名、中央公論新社）で作家デビュー。

著書に『罪人（とがびと）の愛（幻冬舎）』、『稲盛和夫 独占に挑む』（日本経済新聞出版社）、

本名・渋谷和宏で『文章は読むだけで上手くなる』（PHPビジネス新書）など。

TV、ラジオでコメンテーター、メインキャスターも務める。

[次号いよいよ最終回]